

常に新らしきを求めて

伏見 弘

私は昭和7年4月早稲田第一高等学院理科に入学し、大学は採鉱冶金科に進みました。物理よりも化学系を好みましたので坑内系を選ばず、冶金系は炉前の熱作業に耐えられず選んだ道は選鉱、湿式精錬系統の学問でした。

昭和13年4月理工学部卒業と同時に三菱鉱業(株)に入社し、当時拡張中であった北海道手稲鉱業所選鉱課に勤めました。翌年兵役で入隊初年兵教育を経まして所沢、立川と過した後、第一回の航空技術将校となり陸軍燃料廠研究部に勤務することとなりました。後岩国、満州錦西製造所勤務を果しました。研究としては石炭液化法、フィッシャー法を触媒を使ってやりました。触媒選択には苦心しました。その目的は航空燃料の製造でした。昭和17年夏に陸軍石油連絡員として南ボルネオ・バリックパパンに駐在し、ジャワ、スマトラ地域を視察しました。採油、精製技術情報蒐集を任務としました。敗戦色濃くなり仏印サイゴンで終戦を迎え、内地帰還は昭和21年4月末大竹でした。それから会社に帰り、昭和22年春退社しました。

翌23年春より早大専門部工科臨時講師として試錐工学を担当するかたわら選鉱学実験を受持ちました。これから大学での生活が始まりました。

①ボーリングとの接触は学生時代目黒の利根ボーリングを見学したのに始まりまして、ボルネオ、バリックパパンのサンガサンガ石油さく井開発に熱を入れました。終戦後当時国内の天然ガス開発が国策として取上げられて居りましたことを記憶しています。当時早稲田祭に利根又は鉱研よりボーリング機械を



伏見 弘(ふしみひろむ)、大正2年10月13日東京に生れる。京華中学、第一高等学院を経て昭和13年3月理工学部採鉱冶金学科卒、直ちに三菱鉱業(株)に入社。昭和14年入隊、後陸軍航空技術将校として燃料廠に勤務、各地を転戦した後仏印サイゴンにおいて終戦。昭和21年4月内地帰還、一時会社に復職したが昭和22年6月退社。専門部工科非常勤講師(23.4~25.5)、理工学部専任講師(25.6~27.3)、助教授(27.4~33.3)、教授(33.4~59.3定年)。37年7月工学博士。資源工学科主任(42.10~49.9)、体操部長(42.10~59.3)、商議員(49.6~57.5)等を歴任。

借受けて期間中展示実習を実施したものです。

実習用としてRL50型を鉱研より分けて頂き各地に夏休みを利用して役立てました。硫黄に石炭開発に又地熱に活躍したものでした。

② 国策として石炭対策がとられていた時代でしたので微粉炭回収が問題となって参りました。そこで粉粒炭回収はジク使用技術によって改まって参りますと共に微粉浮選技術導入が一役買うこととなり、その面の研究を果したものです。

一方非鉄金属鉱山としては黄鉄鉱が附随し

ていることが多いのでこれが除去対策が問題となっている。そこで浮選挙動追跡を主眼とした実験研究を試みた。

③ 何んといっても我が生涯の上で思出となる研究アプローチは放射性同位元素(RI)との接触であろう。戦前は主として医、農、理学系の理論研究であった。昭和25年4月GHQの許可でAECから日本に ^{125}Sb が輸入され、申請により翌26年より米国からの輸入ができるようになった。戦前はSoft β 線が理研加速器から製造されていたに過ぎないのだが、原子炉の開発によって各種核種に γ, β, α 線を持ったRIが生産されたことによるものである。原子力の平和利用による技術力追求での目的展開であった。

先ず目的に合ったRIの選択ができることであった。稀釈されていくことを前提としたロリッエン管電器とGMカウンターを武器とした ^{32}P 溶液使用による青化液攪拌槽内の流路解析がまず行なわれた。 ^{35}S 溶液による硫化鉄鉱類の吸着反応作用の理論展開である。RI実験室が昭和31年に理工研につくられて、基礎実験が続けられたのである。線源として ^{60}Co を使用し磨鉱回路測定を基礎的、現場的に行なった。

臨界角度測定も実験室的に回転速度変化を行なって測られた。原子炉に黄鉄鉱を入れ ^{55}Fe を持たせた鉄粒として浮選回路測定に役立たせ、流路時間をシンチレーションカウンターを使用して測定した。これによって試薬の添加量、試薬選択性の問題を検討した。鉱液濃度測定を ^{60}Co 線源を利用して試みたが、自動制御への利用を目指したものであった。

又石炭操業への活用の面で、これはジク選炭機の操業解析と自動制御とを結び付けるものである。次いで石炭灰分計の開発を目指した。 $^{60}\text{Co}, ^{241}\text{Am}, ^{137}\text{Sc}$ 線源等利用による迅速測定、自動制御、混炭への活用であった。その他後方散乱によるモデル柱状図の検層試験も行なった。

自然放射能Rn湧出による地殻構造条件を明らかとするために α 線の検出は欠かせない所であることが述べられているが、 β, γ 線測定と共にRnの線測定による観察に注目させられた。地熱開発にも興味を継ぐ所があり、関東各地で地熱調査を試みたものであった。その他坑内断層排ガス中のRn湧出の強弱も興味あるところであった。

④ 次いで重質油、石油関係類の研究を行なった。すなわち原油中のV, Ni, Co回収手法の開発を目指した。それらの含量は微量であるとは申せ取扱量が問題で、上記重金属類の回収量は数千屯にも達するものである。次にガソリン類の節約の問題に着手した。単純なことであるが、水添加による乳化機構の解明に着眼した、高分子乳化剤の使用によるO/W型ガソリン使用である。重質油類についても乳化剤の選択によって可能性がある。何れも補助とタンク設置の必要性があることである。

自動車排気ガスの浄化と有効な消音装置開発である。乳化ベントナイト使用により排ガス中のNOx量の低減と消音効果の上昇に成功した。

⑤ 最近になって力を注いだ試験研究に粘土鉱物類による重金属イオン類の吸着除去、回収がある。精錬廃水中の微量金属イオン類の除去は工場廃水浄化上問題となっている。能率良い除去、回収技術の開発が問題である。パーライト、セリサイト、ベントナイト、ゼオライト、パーミキュライトおよびコーラルリーフ等で7年間継続して吸着試験を実施した。最近になって吸着、除去機構が明らかとなった。粘土工学的成分、構造学的研究と共にpH変化による重金属イオンの吸着解析試験の成果であった。

⑥ その他話題となる事は、半導体 Bi_2Te_3 素子の熱電冷却効果試験であろう。電気試験所と共同研究であり、さしづめ先端技術のはしりであったと思う。次いでNb, Ta精製技術開発研究であろう。これらは原子炉材料とし

て将来の伸びが期待される。Sn精錬 Slag の利用によって未利用資源の利用技術を開発する余地を今後に残した。

あれこれと申し上げましたが、常に前向きな視野に立って技術開発研究を進めて参りました幸いを今さらながら噛みしめて居ります。

- 若人と共に進まん今日の日よ
 - 共に良き日を求めん学びの場に
 - これからも求めん技術研究に生涯を
 - たえず前向きに心して学ばん
- 今日よりは

泡 人

伏見先生へ

——お祝いと感謝の言葉

原 田 種 臣

昭和24年春、卒論として選鉱を選び旧理工学部校舎9号館2階の浮選実験室に入室した。北沢教授は別室におられたので、部屋の主は伏見先生であった。入室当時先生は鶏冠石の浮選の研究を進めておられ、連日MS浮選機を用いてフロスを回収したり、産物の化学分析に没頭しておられたが、そのお姿（とくに頬を脹らませて濾紙上の殿物を丁寧に洗浄中の光景）は35年を経た今でも、筆者の脳裏に鮮明に刻まれている。その成果は、「On the Flotation of Realgar (1950年)」という形で結実した。先生がおおやけにされた論文の第1号の筈である。

爾来先生は80余編の論文を書かれているが、その主課題は、1)選鉱・選炭、2)放射性同位元素(RI)の鉱業技術への応用、3)温泉の探査、4)廃水処理に大別できる。先生は、「粉碎効果に関する実験的研究」で昭和34年に学位を取得されたが、これには⁶⁰Coにより標識されたボールを利用して、尾去沢、釜石、足尾、尾太の諸選鉱工場で、操業中のミル内ボールの飛跡とボールの分布状態を明確にした結果が詳述されており、これは画期的業績と今日

でも高く評価されている。

さて気力旺盛、順風に乗った先生の研究生生活にも青天の霹靂があった。昭和32年9月某日、「早大伏見助教授消息を絶つ」の見出しが全国紙に載った。わが大学で大騒ぎになったことは言うまでもない。先生は遠藤公氏と共に北海道日高山系の鉦区を山小屋に滞在して調査中、雨で下流の橋が流され地元静内町との連絡がこたえた時のことである。地元警察に協力のため、大学から萩原先生と小生が急きょ現地に向かうよう指示された。当時としては異例の飛行機旅行であった。幸運であるべき初飛行の旅を悲壮な決意で過した。「伏見先生いい人だったのになあ」と萩原先生も深刻な面持ちである。千歳空港から車を急がせて静内町へ。翌日早々に現地に向かう覚悟のところへ、「伏見先生一行無事に途中の村落に到着、明朝静内へ向かう」の知らせが入る。先ほどまでの不安感はどこえやら。安らかな眠りにつく。翌日、伏見先生一行とわれわれが劇的対面をしたのは駐在所であった。

伏見先生一行は早大側2人と地元案内者3人で、食糧が尽きる前に山小屋を脱出、途中流された橋代わりに大木を切倒して渡河、大きな危険にはさらされずに下山されたとのことだった。それに当時まだあまり普及していなかった携帯ラジオを購入持参しておられたため、先生一行に対する救助活動のニュースを聴取、安心と同時に大いに当惑されたい。新製品をいち早く入手し、携行するのは先生のお人柄の3大特色の一つである。

第2の特色は、公私にわたる会合への出席率が特別によいことである。おおやけは当然としても、どんなささやかな会にも万障繰り合わせて出席される先生の親切さと心意気には頭が下がる思いである。

先生の第3の特色として、円満さを認めない人はいないであろう。学者仲間の議論の場や固い雰囲気会議の席などで、春風駘蕩の表情から出る先生の寸言は、無二の潤滑剤と

言えよう。そして会議は好ましい方向にまとまってゆくのである。

先生が教室を去ってゆかれることは誠に淋しいことであるが、お食事を共にできないようないくつかの会が学内外で続くので、お会いできるのを心待ちしている次第である。

先生！ 奥様と共に楽しい余生を送って下さい。ここに古稀をお祝いしつつ、ひとこと御挨拶まで。

(昭25採治卒，理工学部資源工学教室)

「思い出の記」

中村 信 栄

私が大学院修士課程も含め、四年間お世話になった当時の理工学部鉱山学科は、演劇博物館（逍遙記念館）に向かって左側にあった校舎で、中には鉱山学科，工業経営学科，金属工学科，それに理工学部本部が同居しておりました。

戦後四年間を経過し、世の中もやっと混乱期を脱し、私共学生は何か人生のバックボーンとなるようなもの、或いは全力で打ち込めるようなものを模索していた時期ではなかったかと思えます。

伏見先生と初めてお会い致したのはその頃で、昭和24年4月初め、我々新制大学三年に編入された鉱山学科学生に対し、必修選択課目の内容・単位等に付き説明を頂いたと記憶しております。

先生が定年退任されるに当たり、先生を囲んでの弟子達の集いで先生にお会い致しましたが、久し振りに会った兄のような感じで、学会・業界に立派な業績を残され乍ら、我々と対される中でその片鱗すら見せられない、そのようなお人柄が我々弟子を惹きつけて止まない、云うなれば先生の素晴らしいチャームポイントではないかと思っております。はるか35年前のオリエンテーションの席上でも、我々が入学前持っていた大学の先生という固定観念からは程遠い謙虚さで、気張らずに訥

々と説明された先生の印象が強く残っております。

学部において先生は試錐工学と選鉱学実習を担当しておられ、私共はそのご薫陶を受けたわけですが、四年も夏休みを過ぎますと、卒論準備の時期に入り、かねてより興味を持っていた窯業（セメント）関係の乾式摩鉱につき先生にご相談した結果、伏見研への入室を許可され、テーマの細部や研究の進め方について御指導を頂きました。その際の先生の後進を導びかれる方法は、今もって私共には真似のできぬものであると確信いたしております。常に本人にやる気を起させる指導に徹しておられ、私には地下室に一室を当てがって下さったおかげで、心おきなく青春の一コマを情熱を傾けて実験に没頭する生活を過し得た、と深く感謝しております。

当研究室の自立性ある研究実験方法と、先生の御指導の素晴らしさは、他学部に籍を置く私の友人達の羨望の的であった事を、今さらのように思い出す今日この頃です。

先生とは、二人して新橋付近を飲み歩き、或は葛生地区ドロマイト鉱山見学後、花火大会にて痛飲し、翌朝先生に抱きかかえられるようにして浅草に帰ったこと、等々懐しい思い出が尽きません。先生の教えを受けた四年間は、いろいろな意味で心の拠り所の一つとなって、今後も私を支えてくれることでしょう。

三月一杯で、多くの人々に惜しまれながら、早稲田を定年退任される先生は、幸いにしてご健康とお見受け致しました。先生が第二の人生を力強く踏み出されますことを、心から祈り、「思い出の記」と致します。以上
(昭26鉱山卒，昭28修士了 ダイカライト・オリエント)

伏見先生と温泉

根本 行 庸

1年のころから、大きな顔で伏見研究室に

出入りしていた。先輩の紹介である事は間違いない。「何でも手伝います」。奇特な人間が現れたので、先輩諸子は歓迎してくれた。

アルバイトの合間に、実験の手伝いをしたのだから、講義を聞くひまはない。まして、そのひまができると、遊んでしまうのだから、今、考えると、よく卒業できたものだと思う。

伏見先生は研究室の兄貴分と言った感じで、なにくれとなく皆の面倒を見てくださったので、それをいいことに、いろいろお願いをした。

——なにかいいアルバイトがあったら紹介してくれませんか——

今思えばなんとも図々しいこと。それでも先生は嫌なお顔ひとつせず、紹介をしてくださった。家庭教師、八幡平のボーリングなどなど。

しかしながら、一番思い出に残っているのは、これらのアルバイトではなく、先輩諸子の研究の手つだいであった。

まず有馬温泉。

生まれて初めて神戸に行った。もちろん新幹線はない。たいへん豪華な旅館に泊って、神戸牛のすきやきを御馳走になった。先生のご指示のままに動けばいいという、楽な仕事であった。

——こんなことなら毎日でもいいな——。

2～3日して調査が終わると、帰りは大阪に出て「南」で更に御馳走になった。「紙なべ」である。ほくほくして東京に帰った。

——大学の先生というものは、なんとたいしたものか！——

次が増富温泉。

これは、先輩の研究に組みこまれた温泉調査であった。

なんともひなびた温泉で、有馬とは雲泥の差であった。国鉄の駅をおりてから、バスにゆられて終点まで。そこから、てくてく山道を1時間。えらいところへきてしまったと思ったが、後の祭り。ここに、それから切れ切

れに、春・夏・秋・冬と、お世話になるとは知るよしもなかった。しかしながら、住めば都。特に秋の景色は最高であった。雨の日などは、旅館の番傘が、真紅に染まるのではないかと思われるほど、紅葉がみごとであった。

——松風と、ドングリと、キスゲの花と、本谷川の川音——

そんな、ある晴れた日の昼下がり、先輩の写真をとった。白樺が美しかったから、秋であったろう。その写真を見た先輩のガールフレンドが、ワンサと増富に押しかけてきたと言うから、私は道をあやまった。山梨県の観光課へゆくべきであった。今ごろは、助役ぐらいになっていたかも知れない。

一方、伏見先生はと言えば、関係方面との折衝で飛び歩きの毎日であった。

ようやく、放射能のコンタも出来上がり、ボーリング地点の候補が上がったあたりで、私は無罪放免になった。

その後、ボーリングは成功したと聞かされた。

次が修善寺。

おなじく、先輩の研究の手伝い。ここは一転して、大温泉街。宿舎はなんと見番の中。これまた、増富とは雲泥の差。どうも今から思うと、温泉地選定については、伏見先生は大変な演出家でいらっしやった。

ある時、野天風呂から、川の中にとびこんで、ひと泳ぎしたら、後で大変しかられた。はだかで泳ぐとは何事であるか。それに、ここは旅館の水洗が流れ込んでいるところだぞ！水洗とは気がつかなかった。これも後の祭り。今でも、修善寺へいくと、ここで泳いだのだなあと、恨めしくも懐かしい。

大学の思い出、伏見先生の思い出が、温泉の思い出になってしまったが、伏見先生と温泉の関係は、切っても切れない方程式にあることは、衆目の一致するところで致し方がない。

「明治は遠くなりにはけり」どころではない。

昭和もかすんできた。定年という言葉はもっと先の話と思っていたが、我々の仲間もそろそろこいつにひっかかって来た。

「おたがいに、年を取ってきたナ」などと言う我々の会話の中に、伏見先生の指定席はなかった。だから、それを聞いたときは本当にながく然とした。

大学からの電話で流れていたのは、たしかにあの本谷川の川音ではなかったか。

伏見先生と奥様の、今後のご健康とご幸福を祈るや切。

(昭30鉦山卒、学習研究社)

ひとつの記憶から

立田 寛

なぜ卒論に「選鉦」を選んだのか、ハッキリした理由はなかった。ただ伏見先生の研究室で実験していた先輩達の姿をみて、なんとなく感動を覚えた記憶がある。

縮小されたガラス製の「コンカル・ボール・ミル」にガラス製のボールを入れて、ボールの軌跡を追いかけた。ボールの大きさを変えてはその破壊力を試した。こんな実験を繰り返して、なんとか「卒論」をまとめることができた。

夏休みに、北炭平和鉦業所で放射性同位元素を使用しての選鉦実験が行われた。ボール・ミルに放射性同位元素を埋込んだ特製のボールを一般のボールと共にミルの中に入れ、そのボールの回転状況からボールの軌跡を探し求めた。また「バウム・ジク」で選炭中の層に放射性同位元素をあて、その浸透力から石炭の工業分析を求めようとする試みだった。その実験に参加する機会が与えられた。といっても、放射性同位元素の入っている容器や計測用機器材を実験現場に運ぶのが主な仕事である。大変な労力がいったが、北海道旅行ができるとなるとその苦労もなかった。

これらの実験がどのような成果をもたらしたか知るよしもなかった。たまたま今般、伏

見先生の最終講義を聴講する機会をえた。先生の永年にわたる大学における業績ともぶべきかずかずの論文を年代順に解説された。それぞれの論文の思い出を、ひとつひとつ噛みしめながらの講義だった。「ボール・ミルの摩耗試験」、「鉦山選鉦におけるRI応用試験」、「選鉦・選炭へのアイソトープ利用」等等。大学を卒業して25年目にして、自分の携わった実験の成果を聞きあらたな感動があった。その日は何十年振りかの大雪の後で、理工学部のキャンパスは白一色になっていた。何の変哲もない教室の教壇にはこの講義を祝ってか、花が飾られてあった。講義の話し方といい、容貌といい、昔とひとつも変らぬお元氣な姿の伏見先生だった。その変らぬ姿には、むしろ25年の歳月を疑いたくなくなった。

(昭34鉦山卒、三菱商事)

伏見先生の思い出の記

内村 東史

小生が伏見研究室に入室したのは、今を遡ること7年前の1977年の春である。3年生も終りに近付いたころ、当時大学へは御無沙汰気味であった小生がめずらしく登校すると、入室する研究室を決定する日であった。親しい先輩も少なく、また授業への出席も芳しくなかったため研究室の内容がよく分からず、決めかねていた。そんな時ふと頭に浮かんだのは、2年生の時の資源工学科野球大会で、年齢をも顧みず果敢に二塁へ盗塁された伏見先生の御姿であった。開発関係の研究に親しもうと考えていたことでもあり「伏見研究室に入れて下さい」と原料系の伏見先生の部屋に直ちにお願いに出かけた。以来7年、原料系と開発系の違いを理解した時小生は博士課程の4年生となっていた。

出会いの頃から先生は非常に好奇心が旺盛で、新しい事象に対する熱意には我々若者も驚かされた。ともすると先走りの傾向も認められたが、とにかく我々教え子に「進取の精

神」を身を持って示された。曰く「ガソリンに水を混ぜて自動車を走らせ省エネを図ろう」「自動車のマフラーに粘土とみかんジュースを添加して排ガスをきれいにしよう。町もみかんの香りで満たされる。」「地中ラドンガス濃度を測定して地下構造を解明しよう。地震予知にも利用できるかもしれない」等々。

本当にお元気な先生であった。その元気な先生が1980年の暮、倒れられた。病院へ行かれた後すぐに入院、佼成会病院であった。入院直後小生も何度か御見舞に伺ったが、最初は口唇だけであった「カサカサ症候群」が次第に頬・額と広がってゆき、それに従い精神的にも相当参っておられる様子であった。

その後先生の病気にも小康状態が訪れ、入院から通院へと昇進され、大学へもボツボツと顔を出されるようになった。しかし見るからに気怠そうで、話し振りにも精彩がなく、ボンヤリ考え込んでいる御姿をたびたび目にするのがあった。「もう先生は昔の先生には戻られないのだなあ。」というのが実感であった。

日がたち、通院の回数も減ったある日、いつもと違う先生を発見した。焦点が定まり、キラリ、とは行かないまでも、素人目にも分かるほど生き生きとした表情で小生に指示された。「どんどんペーパーを出さないと卒業できないぞ」後で聞くと、一週間程前から食事制限が緩和されたそうである。170番の「うま煮チャーハン」、甲州屋の「玉子丼」をこよなく愛された先生にとって、食事制限は非常な苦痛であったに違いない。

以後日を追うに従い目を見張るばかりの回復振り、本当にうれしかった。

そして最近、規則正しい食生活とも相まって、むしろ病気になられる以前よりもお元気にさえ見受けられる。時には御神酒も少々、されど先生油断召されるな。

先日原料工学系研究室のOBの皆様方にお集りいただき、「伏見先生を囲む会」なるもの

を催した。多くの教え子に囲まれたその日の先生は、始終ほほえんでおられ、本当に楽しそうであった。その時小生始めて悲しみを覚えた。「終」を意識し寂しさを実感した。先生を会場からお送りした時鼻が詰ってしまった。

現在9割の不安と1割の希望を抱きながら7年間の思い出の場所をあとにしようとしています。私にとりまして大学生生活、否、青春そのものが伏見研究室とイコールでありました。伏見先生、本当に御苦労様でした。本当に有難うございました。先生同様私も次なる始まりを迎えようとしております。頑張ります。先生もいつまでもお元気でいて下さい。

(昭53資源卒、昭59博士後期退、日商岩井)

資源工学科の動き

昭和58年度

1 資源工学科日誌

4月1日(金) 入学式(記念会堂)

2日(土) 始業式、1年生ガイダンス
学部入学者 51名(うち女子2、一般高校からの推薦入学者7、早実および早高からの推薦入学者各1) 新入生担任は房村信雄教授。

大学院入学式(大隈講堂) 前期課程5名、〔うち資源工学科卒4、教育学部理学科卒1(女子)〕。

4月28日(木) 午後6時より、校友会館において資源工学会総会開催。森田先生の古稀のお祝いを兼ねたため、参加者100名になんなんとする盛会であった。

5月20、21日(土、日) 第20回理工スポーツ大会を河口湖畔で開催。

26日(木) 大学院前期課程推薦入学面接、面接を受けたもの7名(うち資源工学科卒業予定者3、教育学部理学科卒業予定者4)、以上の入学が内定。

6月25、26日(土、日) 資源工学科新入生

のオリエンテーションを追分セミナーハウスにて行なう、参加者は新生生のほか、山崎主任、萩原、房村両教授、野口、綱田両助手、樋口職員、補助員5

7月12日(火)～22日(金) 前期末試験

23(土)～9月16日(金) 夏季休業

9月11日(日) 大学院前期課程入学試験
(筆記)

17日(土) 上記面接試験

以上の結果資源工学科卒業予定者5、教育学部理学科卒業予定者1(のちに辞退)計6名合格

9月17日(土) 派遣研究員梁敬豪(昭40資源卒、昭42修士了、台湾、工業技術研究院 能源与鉱業研究所正研究員)受け入れ、受け入れ期間6ヶ月、受け入れ教員萩原教授。

10月20日(木) 体育祭

21日(金) 大学創立記念日

29日(土) 一般高校からの推薦入学者(59年度)面接、9校に推薦依頼6校から応募、6名の入学内定(うち3名は辞退)

11月1日(火)～7日(月) 早稲田祭

4日(金)～6日(日) 理工展

12月10日(土) 3年生現場実習報告発表会

10日(土)～1月6日(金) 冬期休業

1月11日(水) 教室新年会(於大隈会館)
参加者27名

21日(土) 伏見先生最終講義、33年間の早稲田在職期間を通じて行なってこられた研究の成果を、同位元素の研究を中心に講義された。

2月13日(月) 卒業論文審査会

2月14日(火) 修士論文審査会

2月27日(月) 理工学部入学試験、受験者数16,784名で昨年より2,119名増(うち資源工学科志願者数353、昨年比108名増)、

3月8日(木) 入試合格者発表、資源工学科、発表数は213名

3月22日(木) 伏見教授定年退職にともなう送別パーティーが教室関係者により、午

後6時から新宿住友ビル52階のコックドール・サミットで開かれた。

3月25日(日) 卒業式、学位授与式

学部の卒業生42名(うち女子1)、大学院前期課程修了者13名(うち女子1)、午後6時半から銀座三笠会館で卒業生主催による謝恩会

2 資源工学課教室人事

58年度は、伏見教授をはじめ清廉平、吾妻潔両非常勤講師の定年退職にともなう人事(1)、大学院資源工学専攻中の組織の一部改革にもとづく兼任教員の人事(2)等に大きな動きがあった。

(1) 伏見教授、清、吾妻両非常勤講師の定年退職にともなう人事

3月22日(木) 教授会で伏見教授の退職が正式に決定された。これに溯る人事は以下の通りである。

2月17日(金) 教授会で野口康二助手の助手解任と専任講師新規嘱任(探査工学A、測量学I、II、測量実習、資源工学実験担当)、大和秀二助手新規嘱任(選鉱学)および綱田幸司助手の再任が承認された。

3月7日(水) 教授会で高橋信博非常勤講師(事前処理工学A担当)の新任と今村遼平非常勤講師(測量学)の解任が決定された。

1月26日(木) 教授会で清廉平非常勤講師(冶金学総論)の解任と松村治夫非常勤講師(昭47資源卒、昭53博士課程後期了、冶金原料工学)の新任が承認された。

1月26日(木) 大学院理工学研究科委員会で吾妻非常勤講師(大学院、選鉱製錬工場計画)の解任とその後任として後藤佐吉非常勤講師の新任が承認された。

(2) 大学院資源工学専攻中の一部改組にもとづく人事

昭和59年度から資源科学部門、原料工学部

門を改組し、地質学部門を新設することになった。そのための人事が次のように決定され、2月17日（金）の大学院理工学研究科委員会で承認された。

	旧	新
資源科学部門 (改組)	今井直哉 山崎純夫 大塚良平	今井直哉 大塚良平 鞠子 正 (教育学部教授) 堤 貞夫 (教育学部教授)
原料工学部門 (改組)	伏見 弘 原田種臣	原田種臣 中村忠晴 (教育学部教授)
地質学部門 (新設)		山崎純夫 坂 幸恭 (教育学部教授) 平野弘道 (教育学部助教授)

- (8) 情報関係 6名
日本IBM(2), 日本電気ソフトウェア,
日本DEC, アステック, 富士通東海シス
テムエンジニアリング
- (9) 公務員 1名
特許庁
- (10) その他 4名
三菱銀行, 日興証券, プラス, ポニーキャ
ニオン・グループ
- (11) 就職希望せず 2名
- (12) 大学院進学 9名
早大資源(9), (うち研修生1を含む)

大学院 (前期課程) 13名

日鉄鉱業, 三菱金属, 石油公団, 三井物産,
日本オイルエンジニアリング, 愛知県庁,
キャタピラ三菱, キヤノン, 日本DEC(2),
富士通京葉システムエンジニアリング, 富
士通, 大学院後期課程

3 就職状況

学部

- (1) 鉱業 2名
日本鉱業, 古河鉱業
- (2) 石油開発 7名
日中石油開発, 帝国石油, 石油資源開発,
三井石油開発, アラビア石油, 出光興産,
ハリバートン・オーバースィー。
- (3) 石油化学 3名
シェル石油, 共同石油, モービル石油
- (4) 化学, セラミックス 4名
積水化学工業, 東芝セラミックス, 京都セ
ラミックス, TDK
- (5) 機械 2名
鉱研試維工業, 新菱冷熱工業,
- (6) 建設 1名
東洋建設
- (7) 商社 1名
ニチメン

4 学位取得者

課程によるもの

- 工学博士 (59年3月)
崔善奎
論文題目「韓国蔚山鉱山におけるスカル
ンの進化および鉄・タングステン鉱化作
用とこれに伴う多金属鉱化作用」
(主査, 今井直哉)
- 樋口真次
論文題目「炭素の炭化過程における微細
構造に関する研究」
(主査, 大塚良平)

課程によらないもの

- 工学博士 (58年6月)
立松英信 (昭45資源, 国鉄技術研究所)
論文題目「青函トンネルにおける粘土鉱
物と湧水の水質に関する研究」
(主査, 大塚良平)
- 工学博士 (58年10月)

朴魯栄

論文題目「韓国錦城鉱山におけるモリブデン鉱化作用と鉱床の探査・開発」

(主査, 今井直哉)

工学博士 (59年3月)

鈴木明人 (昭40資源, 大成建設技術研究所)

論文題目「海底穿孔発破工法の研究—爆薬の爆轟によって生じる水中圧力波の挙動に関する実験的研究」

(主査, 萩原義一)

江口 工

論文題目「ローラービットによる大口徑掘さく技術の開発と実用化の研究」

(主査, 萩原義一)

5 専任教員海外出張

房村信雄

5月8日から2週間, ペルー (技術協力)
9月8日~9月25日, 西独 (ILO主催第6回国際じん肺会議出席)

山崎純夫

綱田幸司

7月26日~8月2日, 韓国 (中生界に産する石炭ならびに植物化石の採取)

山崎豊彦

8月21日~9月4日, 英, 仏 (第11回世界石油会議出席, EOR研究状況調査)

6 訃報

故藤井鹿三郎先生未亡人

昭和58年6月永眠され, 告別式が9日自宅において行なわれた。

斉藤平吉元教授

昭和58年10月26日心筋梗塞により91才にて永眠された。故人がかつて所長を勤められた早稲田大学理工学研究所に近い新宿区喜久井町の感応寺において, 28日葬儀, 告別式が行なわれた。

大溝友吉氏

昭和3年採鉱冶金学科を卒業され, 北海道炭鉱汽船勤務, 同社退職後悠悠自適の生活を送っておられたが, 昭和58年11月25日死去された。葬儀, 告別式は26日に自宅で行なわれた。

以上心から哀悼の意を表する。

編集後記

寒くて長かった今年の冬もどうやら終わりを告げ, 桜前線も1~2週間遅れでこのところ順調に北上しつつあります。この時期に資源工学会報第19号をお届けできることになり, 肩の荷を卸した感じです。

さて, 昨年は森田先生, そして今年には伏見先生が定年退職され, 同時に何人かの若い人達を後継者として迎え, 資源工学科の教室もかなり若返りました。今後の躍進が期待されます。

ところで本号は従来と編集方針を多少変えて, 伏見先生をお送りするところに焦点を絞って編集しました。もっともっと大勢の卒業生の皆さんに, 先生の思い出の記のようなものを書いて頂き, それを載せたかったのですが, ページ数の都合でそれが出来なかったのが残念です。最後に皆さんのますますのご健闘を祈ります。 (萩原義一記)

〒160 東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 電話03-209-3211内線2137

振替番号 東京1-143534

協和銀行早稲田支店 普通141-322760